

バレエの交差点～シアター・ノート

ヤング靖子

皆様は、「シンガポールを一言で」と聞かれたら、どんな風に表現されるでしょう。金融の中心地、世界一忙しい港、教育熱心なお国柄、勿論、観光も有名ですね。今や名目GDPでもアジア1を誇り、堂々たる先進国となったシンガポールは近年、芸術分野にも力を入れています。

私は、シンガポール唯一のプロのバレエ団、シンガポール・ダンス・シアター (SDT) でアンバサダーズ・カウンシルにいます。SDTは、バレエ留学から戻ったダンサー達がその経験を活かせる場所として、32年前に創立されました。現在は、国内、海外公演以外に、市民講座、バレエ教室、出張授業など様々な場面で踊りを通じ、社会と関わっています。「シンガポール人のカンパニーですか」と質問される時もありますが、いえいえ、41名のダンサー達は、北はノルウェー、南はオーストラリアまで世界11カ国から集まっており、日本人ダンサーもプリンシパル2名を始め13名が所属しています。それぞれにユニークなバックグラウンドを持ち、子供の頃からの夢を叶えた人達です。因みに、日本人会でバレエ講座を担当される杉田恵先生もSDTのご出身です。

現在、新型コロナウイルス (COVID-19) 対策として、シンガポールに限らず多くの国で劇場は閉鎖されています。改めて考えると、私達はなぜ劇場に行くのでしょうか。私は、研ぎ澄まされた音色や鍛え抜かれたダンサーの踊りに、インスピレーションのような感動を受け、胸をときめかせる瞬間を楽しみに、劇場に向かいます。それで思い出すのは、去年、シンガポール・ラオス国交45周年の祝賀行事として行われたピエンチャン公演です。上演は一夜限り、チケットは無料。舞台装置の技術的な挑戦もありましたが、満員の会場で、初めて舞踊芸術に触れたお客様の昂揚感を、大きな拍手や笑顔を通してダンサー全員が肌で感じた忘れられない経験でした。

お客様にとって観るというのは受動的なことに感じられるかもしれませんが、ダンサー達はお客様の反応を受け止め、お互いが受動と能動の間を行き来しながらその日だけの空間が出来ていきます。舞台とは、ダンサーやオーケストラと、お客様との双方向で造り上げる空間なのですね。年齢や性別に関係なく、美しいものに包まれる時間はとても自由で、心が解放されます。上演前、オーケストラのチューニングの音にワクワクしているお子さんを見かける時、あるいは終演後にお友達同士で笑いながらお帰りになる後ろ姿を見かける時、私は心から嬉しくなります。

コロナ上陸以降、「不要不急の外出を控えて」というフレーズを耳にするようになりましたが、個人的には、不要不急以前の劇場で観た美しい踊り、コンサートホールで聴いた力強い音色が、心を前向きに整える力になっている気が致します。

シンガポールには素敵な劇場やホールがあり、そこをホームとするバレエ団やオーケストラがあって、上質の舞台を気軽に楽しめます。舞台芸術の再開を待つ間、シンガポールのアート・シーンを支える人々、舞台の楽しみ方などをご紹介させて頂くことになりました。どうぞよろしくお願い致します。

画像提供：シンガポール・ダンス・シアター、田中七瀬、三浦丈明

プロフィール：ヤング靖子

Singapore Dance Theatre アンバサダーズ・カウンシル。

シンガポールは2度目通算11年目です。自宅待機中はお料理、園芸、読書の日々でした。



SDT シーズン2020
“Dare to Dance” 動画



3月公演「ロミオとジュリエット」オーケストラと共にカーテンコール
(ロミオは南十字星4月号ハローインタビューに掲載された上妻悟さん)



ジュリエットは南十字星4月号ハローインタビューに掲載された中濱瑛さん



魅力的な登場人物がストーリーを彩る生き生きとした「ドン・キホーテ」



シンガポール・ラオス国交45周年記念公演より「Evening Voices」(ラオス国立文化会館)



野外公演(Ballet Under the Stars)より「ミッドナイト・ワルツ」



SDT創立30周年を祝う舞台リハーサルの一コマ(エスプラネードシアター)